

テーマ「高度で専門的な技能の維持・継承」

副題 地域との融合による技術・技能の維持・継承

所属施設 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構

執筆者 竹口 浩司（中国職業能力開発大学校附属島根職業能力開発短期大学校）

1. はじめに

建築業界では、様々な技術や技能が存在している。例えば大工工事や木工作業、左官作業などが上げられるが、近年、大工工事における技能の多くは、木材のプレカット技術の向上や施工費の問題から平準化され、大工工事における技能継承の必要性が薄れ、若手の大工は墨付けもしたことがない者が増えてきている。しかし、伝統的な大工の技術は、世界に誇れるものであり、ユネスコの無形文化遺産に登録をする動きもあり、その価値は衰えることはないだろう。

建築に関わる技術や技能は、直接的に建物を建てるだけではない。左官作業が特にそうだが、仕上げ材として紀元前から存在するものであり、その技能は、仕上げるだけでなくその素材の調達にまで至る。現在の建築は、様々な材料を各建材メーカーのカタログから選定するのが一般的であり、その素材を各地域に出向いて調達するなど特殊な建築のみであろう。建築を学ぶ学生もカタログから建材を選定することが当たり前となり素材については、施工が容易で安価なものを基準に選定することになる。それ自体は、安く安定した品質の建物を一般的に施工できる技術の一面であり必要であるが、モノの本質を知らずにいることで、建築の価値の創造を阻害すること等が懸念される。

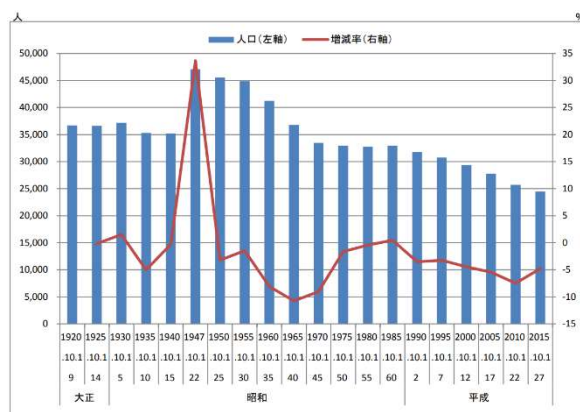
専門的な技術・技能の維持・継承についても、皆が気づかない、普段の生活を支えている技術・技能を知っていることが維持・継承の第一歩であると思われる。今日においては、その気づかない技術や技能の発信、認知も向上させずにいるのは、無いものと同じであり、それが今日における技術・技能の維持・継承の課題とも言える。

島根県職業能力開発短期大学校（以下、「島根短大」という。）の住居環境科では、都会から遠く離れた地方だからこそ残っている技術や技能である土、木、竹等の地域素材の加工法を校外実習で学んでいる。それらを基盤として、2018年度総合制作実習課題「江津駅前ビルのリノベーション」に取り組み、地域課題と向き合い実践したことについて述べることにする。

2. 島根県江津市について

島根短大がある島根県江津市は、都市部から離れた山陰地方の人口 24,468 人、高齢化率 36.6%（2015 年調査）の過疎化の進む市である。産業としては、日本三大瓦の生産地として、石州瓦が有名であるが、地震対策や嗜好の変化により瓦産業も衰退している。高齢化も進み、産業も衰え、技能だけでなく、様々な課題に直面しており、建築の側面からみても、空き家、インフラ問題等、多くの地域が

表 1 江津市の人口動向



抱える同様の課題も載積している。

ただ、江津市は、戦争被害や自然災害は少なく、高度経済成長期以降の再開発も進んでおらず、昔ながらの瓦の街並み（図 1）が残り、海と山に囲まれた自然豊かな地域であり、瓦の素材である土、木、竹等、昔ながらの建築素材も地域には豊富に存在する。和紙や陶器などの伝統工芸の技術・技能も中山間地域だからこそ多く残っており、昔からの自然との関わり方や知恵や技術を持った高齢者も健在であり、人や団体、建材として使用できる素材に触れる機会も多い。さらに、江津市の特徴として近年、江津市ビジネスプランコンテスト¹⁾に代表される産業振興も注目されており、江津市役所や商工会議所、NPO 団体など人と人との繋がりがしやすい恵まれた環境でもある。



図 1 江津市の街並み

3. 当校の取り組み

① 地域実践活動

過疎化が進み、街の活気が衰える中、島根短大の地域での存在は大きく、地域と結びつき、様々な取り組みを実施しており、学生による空き家、空き店舗、社の改修など建築の技術・技能を活かした実践活動も多く行っている。空き店舗の改修では、2013年～2014年に江津駅前商店会や商工会議所と共同で空き店舗のリノベーションを、2016年には、空き家からカフェとベーカリー店舗へ改修する作業（図 2）にも携わり、江津市内にある県立工業高校のサポートとして、空き店舗の改修を行い、その取り組みにより、その県立工業高校は、建築甲子園で優秀賞に輝いた。2019年で4年目となる社の改修では、江津市にある新四国八十八カ所の社を毎年総合制作実習課題として改修している。（図 3）また、地域の歴史街道の東屋製作（図 4）等、島根短大で力を入れている大工工事の技術と技能が地域の活性化にも繋がっている。



図 2 空き家の改修



図 3 社の改修



図 4 東屋

② 校外学習

島根短大では、地域性のある校外実習も取り入れており、その 1 つが林業体験である。県西部農林振興センターと協力し、住居環境科 1 年生が毎年取り組んでおり、建築には欠かせない木材がどのように管理・伐採され、加工されるのかを山から製材所までを辿り体験する。そこでは、林業に従事する方から直接話を聞き、チェーンソーを使用した伐採も行う。(図 5) 製材所での木材の製材工程や合板工場などの見学も行い、建築に携わる者として、素材に関わる知識やそれに携わる職能などを知ることができ、この体験から林業に興味を持ち実際に就職した学生がいる。

もう 1 つは、地域課題対策としての竹林体験である。中山間地域では、竹による竹害問題が深刻である。半世紀前までは、竹は建築や生活に欠かせないものであり、適度に伐採、間引きされ循環していたが、近年では、建築材料として使用することも少なくなり、筍を取ることが減り、周辺の生態系を変えてしまうほど竹林が拡大している。そこで、地域課題と古くからの建材としての竹に触れることを目的に竹林体験を行っている。竹の加工法などの技術を地域の団体と共に取り組み、竹のドームやシェル構造、イルミネーションの製作を建築の技術を応用し毎年取り組んでいる。(図 6)

地域産業であり、日本三大瓦である石州瓦の産地として近隣の工場見学を実施している。(図 7) 近年、建築業界では、地震被害等の影響により、瓦の生産が減少しているが、建築を学ぶ上では、外すことができない素材である。歴史を辿ると石州瓦は、陶器の中で最も高温で焼成される素材であり、その土は、近隣で採集され、釉薬も島根県内で採取されている。そういった原料から学ぶことは、そのものの価値を図るためには欠かすことはできず、現代のパソコンやスマートフォンなどの小さな画面で検索する以前に存在を知らないことも多く、それぞれに職能があり、地場産業や地域の歴史としての側面からも継承すべき技術や技能が存在する。



図 5 林業体験



図 6 竹林体験



図 7 瓦工場見学

4. 2018 年度総合制作実習課題

① 概要

地域の協力を経ながら取り組んでいる校外学習で得た地域課題、地域素材、知識、技術、技能等の一つの集大成として、2018 年度総合制作実習課題で取り組んだ「江津駅前ビルのリノベーション」をより詳しく述べるものとする。

本総合制作実習課題は、1 年次に校外実習を行ってきた住居環境科 2 年生 6 名による実践活動であり、地域の技術や技能の維持・継承を含みつつ、意匠性や SNS での発信、地域との繋がり、更に地域課題にも目を向けた取り組みである。

② 江津駅前ビル

江津駅前ビルは、江津駅ロータリーの北側に位置し、その形から通称「軍艦ビル」とも呼ばれている。昭和42年竣工の5階建てRC造の建築物で1階部分が店舗、2階以上は一部店舗と住居で構成された複合建築物である。現在では、人口流出や車社会の進展に伴う郊外化が進み、江津駅前の商店街を行き交う人も少なく、店舗数も減り1階部分は15店舗中7店舗が空き店舗となっている。(図8)



図8 江津駅前ビル

③ 2017年度の取り組み

2017年初旬、江津市内の建設業、建材メーカーなどが出資し、設立されたまちづくり会社(株)石州あかがわらから島根短大に、老朽化が進み、空き店舗が増えている江津駅前ビルを江津駅周辺のソーシャルデザインを踏まえて地域のランドマークとなる商業施設を新たに計画したいとの考えを伺い、2017年と2018年の2ヵ年において総合制作実習課題で取り組むこととした。

2017年度の総合制作実習課題では、新たな江津駅前ビルの設計のため、地域の方々へのアンケート調査や関係者へのヒアリングを通じて、地域課題解消と江津らしい新たなデザインの提案を行い設計計画や模型を製作した。また、その模型を江津市の交流センターで展示し、パブリックコメントを収集した。(図9,10)



図9 ヒアリング調査結果



図10 新江津駅前ビルの模型

④ 2018年度の取り組み

2018年度は、前年までの基本的考えのもと、空き店舗の一つを使い、新しく立て替えた際の新江津駅前ビルへの出店を考える方が期間限定で開業できるチャレンジショップへのリノベーションを行った。このチャレンジショップは、2017年度に取り組んだ江津らしいデザイン「MADE IN GOTSU」をコンセプトとし、基本構想を図11に示す。

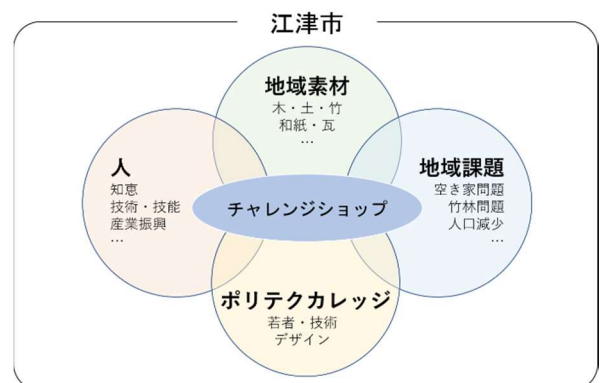


図11 基本構想

江津に残る地域素材、昔からの知恵、伝統技術、関連する職人の技能、そして、江津市での地域課題や定住対策の一環で産業振興として取り組んでいる「江津市ビジネスプランコンテスト」入賞者の協力も得ながらリノベーションを実施し、地域課題や昔からの知恵、技術や技能を学ぶ実践的活動となった。

4-1. 木

チャレンジショップのデザインとして大半を占めるのが木材である。木材は、島根短大の大工工事作業や校外学習で取り組んでいる林業体験の知識が活かしている。学生全員が大工工事作業の3級技能士を受験することや、木造の模擬家屋を建てることから島根短大の学生は、他大学よりも木に触れる機会も多く、林業体験による知識もあり、木という素材に対する思い入れも大きい。島根短大の住居環境科では、大工部を創設し、部活動として時間外実習を行っている。

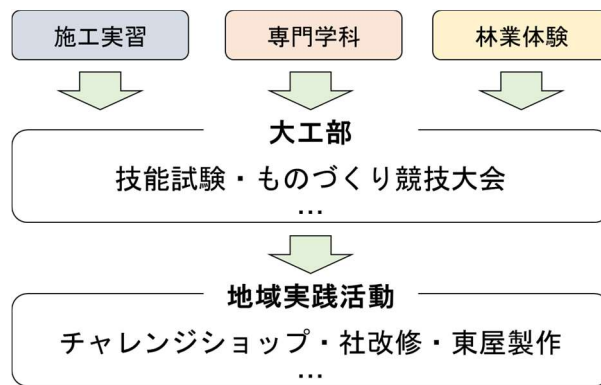


図 12 木に係るフロー

大工部で技能向上を図り、中央職業能力開発協会が開催している若年者ものづくり競技大会²⁾において、建築大工部門と木材加工部門に出場している。建築大工部門に至っては、2017年敢闘賞、2018年特別賞を受賞している。その他にも在学中に技能検定の大工工事作業2級技能士に合格する者もあり、技能は、高いと自負している。地域活動をもみても、4年間続いている地域の社の改修や東屋の製作などから、島根短大の技術力に対する地域からの高い信頼がある。木の施工技術における技術習得を図12に示す。

林業体験では、地域にある合板工場の見学も行っており、下地に使用する合板までもこの地域で取れた木材であり、その加工技術も実際に学生たちは目にしている。チャレンジショップでは、林業体験でお世話になっている県西部農林振興センターが行っている島根県みーもの森づくり事業³⁾の一環でもある。

チャレンジショップのデザインも、学生が考え、普段から培われた大工工事や木工作業の技術を存分に活かされた壁の板張りや床の寄木張りが特徴である。(図13)

壁には、木材にレールの様な溝を彫り、棚を自由に移動させることができ、チャレンジショップとして多様なニーズに答えられるデザインとなっている。(図14)



図 13 床の寄木張り



図 14 壁の板張り

大工作業等の基本的技術や技能は欠かせないが、新たなデザインを取り入れ融合させることもこのような技術や技能を継承していく上では必要不可欠であると、この活動を通じて伝いたいことである。しかし、そのデザインにおいても素材と触れ合い、知識を持ち、そこに技術や技能があることで形になる。その考えは、木を使用した壁や床、什器の仕上がりからも見て取れることだろう。本課題に関わった学生の中には、大工として働いている者もあり、リノベーションを通じて現場での部材の納まり等を経験したことは、実務においても現場の理解が早くよい経験となっている。

4-2. 竹

竹は昔から建物の下地材や仕上げ材、足場として建築には欠かすことのできない素材であったが、現在では、新建材や鋼材の足場が変わり一般的な建築で使用されることはなくなってしまった。さらに、中山間地域から都市部へ人口が流出し、一般家庭でも筍を収穫する等、生活として関わることも少なくなり江津市を含む中山間地域では、竹林が拡大し、イノシシ被害や土砂崩れ、森の生態系、民家が近いところでは日照問題や道路を塞ぐ等竹林被害が増えている。

島根短大では、竹林問題に取り組んでいる樹冠ネットワークと協力し、1年次に竹林体験の授業を行っている。実際に竹林の現場に行き、その現状から課題を認識し竹の伐採方法や加工法を職人から教わっている。また、建築を学んでいる学生として、その伐採された竹を使用して、ドーム構造やシェル構造の造形物、地域のイベントで使用するイルミネーションの製作を行い、その職人から教わった知識や技術を使いながら新たなデザインを取り入れ活動している。(図 16)

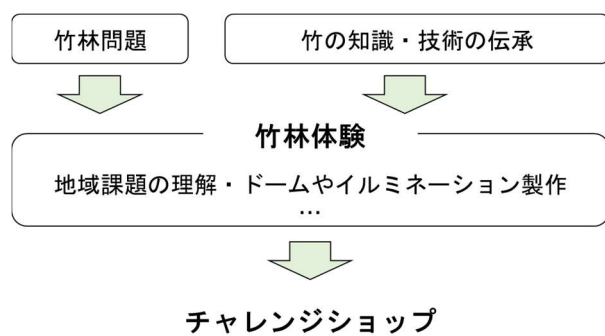


図 15 竹に係るフロー

チャレンジショップでもその知識と技術を使い、江津市内の竹林から真竹を採取し、節を抜き、重曹を入れた熱湯で煮沸することにより油抜きを行い、チャレンジショップの天井に使用した。(図 17, 18) 竹という誰でも知っている素材であるが、自然の素材を使用するためには様々な知恵や技術が必要であり、実際に施工すると曲がっていたり径が違っていたりと新建材だけしか触れていない者にはそのような問題があることも知らず、油抜き等の工程も知ることはないだろう。中山間地域だからこそ昔の生活に密接した知識と技術を持っている職人に触れることができ、そこから学ぶべきことも多い。

一般に、職業としての技術や技能だけでなく、地域性や昔から引き継がれてきた技術や技能もあり、多角的に取り入れ融合させることが必要であると竹を通じて、人と触れ合うことにより考えさせられ、多様な人と会うことが学生にもよい刺激となり学ぶ意欲も向上が伺える。



図 16 竹イルミネーション



図 17 油抜きの様子



図 18 天井の仕上げ

4-3. 瓦

都市部の住宅街では、見ることの少なくなった瓦葺きの屋根だが、江津市は、地域産業として瓦があることや災害が少ないこと、都市の再開発が遅れていること等から昔ながらの瓦の風景が広がっている。石州瓦の特徴である来待石を釉薬に使用した赤瓦が多く地域の景観を形成するとともに産業としてだけでなく歴史的にも重要な素材である。

島根短大では、近隣の瓦工場に協力頂き、毎年、工場見学を行っている。土を数年間寝かせ、配合し整形した瓦に釉薬を塗り焼成するまでの工程や手作業での鬼瓦の製作も見学することができる。江津市において、建物の重要な要素としての瓦に触れる機会は、他の地域では珍しく江津市の地域性を学ぶ良い機会となっている。

チャレンジショップにおいても瓦は、重要な要素であるが、そこにデザイン性と新たな瓦の使い方の提案を試みている。瓦の製造において課題となっているのが、規格外の瓦の処理であり、株式会社丸惣では、それを粉砕し庭石等に再利用している。それをチャレンジショップでは内装に使用し、壁と床との取り合いの見切りとして採用している。これにより、床と壁との寸法誤差が関係なくなり、施工が容易になるだけでなくデザイン性も考えている。(図 20)

瓦においては、新たな瓦を使用するのではなく、100年以上前に作られた蔵の屋根に使用されていた古瓦を使用し、外部照明とした。(図 21) これは、瓦の技術が100年以上持つことや地域課題として江津市に多く存在する古民家を資源として再利用することと昔の登り窯の技術で焼成されていた瓦を継承することにも繋がる。

高度経済成長期以降の大量生産に押され廃業した瓦タイル工場からは、規格外のものだったのか大量に捨てられていた瓦タイルを再利用した。それを見る限りでも、瓦タイルが4枚一組で焼成されていたことを知ることができる。それは、一定した既製品とは違い焼成具合や釉薬の塗布の微妙な違いによりひとつひとつが異なりその風合いが落ち着いた印象を与えてくれる。寸法も微妙に違い施工には注意が必要であった

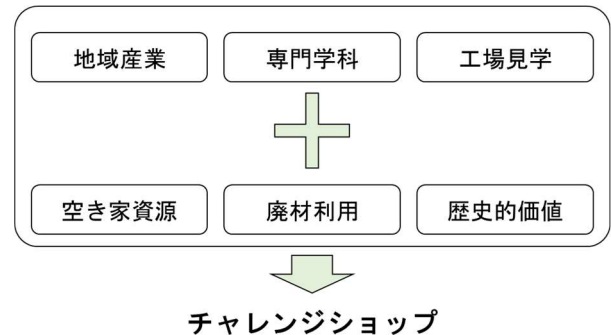


図 19 瓦に係るフロー

が、左官職人の指導により仕上げる事ができた。(図 22)

瓦は、技術・技能の維持・継承、歴史や地域産業にも関わり建築の屋根材としてだけでなく地域を代表する素材としての継承を試みている。地域課題である空き家問題に対する取り組みは、空き家の素材も一つの資源として捕らえ、瓦以外にも土や木材等景観を維持するとともに地域の課題にも取り組んでいる。



図 20 粉碎瓦



図 21 外部照明



図 22 瓦タイル

4-4. 土

江津市が日本有数の瓦産地にまでなった理由が江津市内の都野津層から採取される良質の土があるからである。また、古い街並みの残る地域では、土壁の家も多く存在し、そのような古民家が空き家になり、廃墟と化し倒壊の恐れのある建物も存在する。そこで地域素材と空き家を資源と捉え、チャレンジショップでは、解体される古民家から土を採取し、内装材として再利用することにした。(図 24)

土壁等の左官作業においては、熟練した技術・技能が必要であるため、本活動では、女性左官職人として活躍している方にご協力頂いた。(図 25)

土壁の土はそのままで使用できず、ふるいにかけてゴミや石を取り除き、新たに藁を入れて練り直し養生期間を取る。仕上りは、左官職人の提案により厚めに仕上げ土壁に割れを出すことにより土壁の風合いを強調した仕上がりとした。(図 26)

左官作業は、知識はもとより土に対する水の配合や養生期間等経験と技能が要求されるが、現在では、その仕事を目にする機会も少なくなった。技術の継承という観点では、それを知ることが大前提であり、本

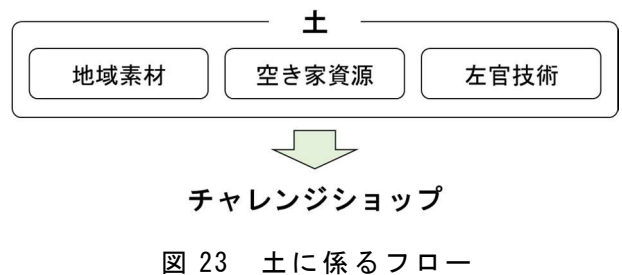


図 24 再利用した古民家の土壁



図 25 左官指導の様子

活動においては、土壁の他に江津の街に多く使用されている漆喰も採用し、その技術を体験することができた。(図 27)

土壁や漆喰を体験し、大工作業が苦手な学生が左官作業では、飲み込みが早くきれいに仕上げる結果となった。また、大工作業が得意でも左官作業は苦手で職種の向き不向きも体験させることでわかることもある。

左官作業は、養生や作業工程も躯体箇所と違い、施工管理、現場監督として内定を得ている学生にとって左官作業の工程を学習する貴重な機会でもある。



図 26 土壁



図 27 漆喰

4-5. 和紙

江津市内の中山間地域では、昔から楮(こうぞ)が栽培され和紙の産地として、江戸時代までは 6400 軒もの工房があり、幕府への献上品、上納品として石見を代表する産業であった。

しかし、戦後の高度経済成長期以降の需要の低迷でそれまでに残っていた 341 軒の工房も現在では 1 軒のみとなっている。

その 1 軒が石州勝地半紙であり、本活動に協力頂いた。和紙作りは、高度な技能を必要とする職種であるといえるが、その後継者として現在工房を営んでいる方もその歴史と技術を維持・継承するため和紙を作り続けている。しかも石州勝地半紙には、130 年前に作られた日本最古で最大の甕(こしき)があり、自ら栽培した楮をその甕で蒸し、和紙を製作している。

本活動では、仕上げ寸法に合わせて自らの大工技術を活かし和紙漉き器の製作から行い、天井と壁の一部の仕上げに使用する和紙を職人の方指導のもと学生自ら漉いて製作した。(図 29)

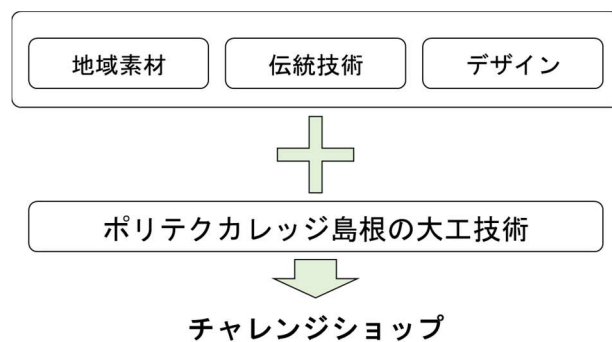


図 28 和紙に係るフロー



図 29 和紙漉きの様子

和紙を漉く技術は、一日で習得できるものではないが、仕上げも考え和紙を厚く漉き、ムラも風合いとして活かすため原料である楮の表皮を和紙に入れたデザインとした。(図 30) この提案は職人の方からによるもので多くの知識と経験から学生が漉いても良い仕上がりになるよう考えて頂いた。

和紙は天井だけでなく、壁の一部にも使用している。壁紙としても和紙は高級品として使用されることもあるが、チャレンジショップでは、さらに高い技術を使用する袋張りを採用している。袋張りとは、下地に空気を含むよう楮紙を貼りより柔らかい印象を与える施工法である。

様々な技術・技能の維持・継承においても、臨機応変な対応により敷居を低くしながらも、和紙の素材を活かした仕上がりを作り出すことも必要である。



図 30 天井に施工した和紙

4-6. 柿渋

柿渋は昔から防腐材として木材に使用されており、現在でも自然塗料として広く販売されている。その原料となる刀根柿は、食用でもなく柿渋の需要の減少とともに数を減らし、中山間地域である江津市でも多くはない。

本活動では、柿渋を作る知恵と技術を持った職人の方に協力を願い、刀根柿を採取するところから教わる事ができた。(図 32, 33) 刀根柿の絞り方や発酵過程で腐るのを防止するために茄子を一かけ瓶の中に入れることや柿渋を使った籠の作り方等現在では、継承もされることのない技術も教わる事ができた。チャレンジショップでは、柿渋を内外の木壁や天井の古材に使用している。この地域でも職人の方が居なくなればこの知恵と技術を引き継ぐ方は居ないかもしれないが、学生が経験したことは、知識となりこの体験から引き継がれるかもしれない。

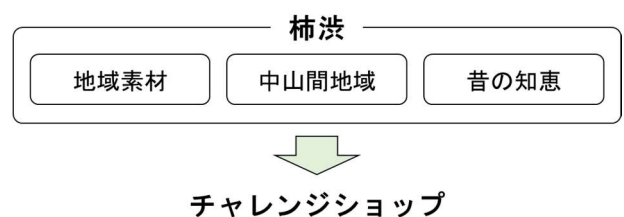


図 31 柿渋に係るフロー



図 32 刀根柿の採取



図 33 柿渋製作の様子

4-7. 蜜蝋

蜜蝋は、家具の表面を保護するワックスとして使用され、柿渋と同じく自然素材として広く使用されているがその蜜蝋を一から作ることは、無いだろう。

産業振興として毎年開催されている江津市ビジネスプランコンテストのファイナリストとしてハチミツプロジェクトを発表し優秀賞を受賞した方に原料となる蜜蝋を提供いただいた。江津市ビジネスプランコンテストの特徴は、大賞を受賞した方以外にも地域のサポートを受けて開業している方が多いのが特徴であり、チャレンジショップでは、建具の依頼先もビジネスプランコンテスト受賞者である。

原料は、受賞した方が飼育している日本ミツバチの百花蜜で作られた蜜蝋である。

(図 35) このハチミツも江津市内の花から集められた蜜であり、ワックスとして使用するために混合する油も江津市内で栽培、製造されているえごま油を使用した。えごま油は、がんの発生を抑制、高血圧予防、認知症予防等健康食品として有名で江津市の特産品として道の駅等でも販売されている。

えごま油は、乾性油に分類され木材に塗布すると木材に浸透し、木の木目や風合いを活かし、水分や紫外線から木材を保護する塗料としても使用される。チャレンジショップでは、内部の什器や壁面のオイルフィニッシュ仕上げと、蜜蝋と湯煎し混ぜ合わせることで蜜蝋ワックスを製作し、家具や棚の表面を保護するワックスとして使用している。(図 36)

4-8. その他

地域素材として、日本海に面している地理から海岸の流木や空き家問題を資源とした古民家の古材の再利用、瓦を運ぶときに使用されるパレット、江津市の特産品である苔や石見焼のはんど、豊富な森林資源からバイオマス発電所に使用される広葉樹、江津ビジネスプランコンテスト 2017 で優秀賞を受賞し、I ターンされた家具職人による地松を使用した建具等江津市内の知識や技能、地域素材、人との繋がり、産業振興、

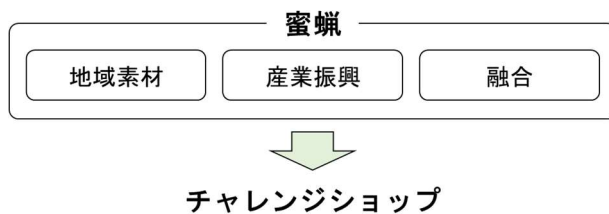


図 34 蜜蝋に係るフロー



図 35 蜜蝋



図 36 蜜蝋に係るフロー

地域課題等を考え地域全体で考えるソーシャルデザインとして取り組みチャレンジショップという一つの空間を作り上げた。(図 37、38)



図 37 内部空間



図 38 外部（夜）

5. 総括

技能・技術の維持・継承と言ってもその職種や地域により取り掛かりや課題も様々であることが本活動を通じて認識することができる。そこで、本活動を「地域実践活動」「地域」、「情報発信」、「多様性」の項目に分け総括する。

① 地域実践活動による維持・継承

学生は、校内で基礎学科と大工工事を主とする施工技術を習得しているが、現場では、解決に苦慮する多くの問題に接する。特に、リノベーションでは、既存部との取り合いや水平・垂直等の実習場内で用意された課題では、理解できないこともある。本活動を通じ、就職した学生の中には、本活動があったから就職先での理解が早くなったとの意見がある。この実践活動も専門課程での基礎的な施工技術の積み重ねがなくては2年では到達できない活動であり、島根短大の技能検定や若年者ものづくり競技大会への挑戦が技術を底上げし、技術の向上を図っている。

また、社の改修や東屋制作においても、単に設計し施工するだけではなく、地域の方や職人と出会い話を聞くなかで、その地域のもつ歴史や意味、受継がれている工法等を読み取り具現化するプロセスは建築をすることの一つの要素であり、それを学生に経験させ、残していくことが地域による維持・伝承の足掛かりにもなると考える。

さらに、新たなデザイン力も必要不可欠でありデザイン力の向上のため、近年建築科学生コンペティションに向けた取り組みも行っている。

② 地域による維持・継承

江津市内の素材を探し活かすことを考える中で様々な人や団体と協力し、多くの知識や技術・技能を教わったことは貴重な経験である。左官作業では、土の再利用を通じて空き家問題と向き合い、和紙漉きや瓦を通じて地域の歴史や産業を理解することができた。カタログからでは、知ることもできない様々な知恵や技術が融合し新たなデザインとして学生に人との繋がり大切さも伝えられたと確信する。一人の学生が、

「江津って凄い！」と、言っていたことを思い出す。人口 2 万 4 千人ほどの小さい市でありながらその可能性を様々な素材を通じて人と接することから学んだ多くの知識や技術がこのチャレンジショップに集約している。各種の技術・技能の維持・継承を個で考えるのではなく地域という単位で考え、そこに残る素材や技術を見つめ直した本活動は、これからの地域創世の一つのあり方といえるのではないだろうか。

③ 情報発信による維持・継承

本活動は、ウェブページ⁴⁾ (図 39) や SNS を通じ多くの方に進行状況を届ける活動も行って来た。技術・技能の維持・継承においても知ることが第一歩であり、江津市に存在する様々な素材や技術を持った人や団体を知ってもらうため、完成した空間だけでなくその過程も重要であると考えた。その結果、江津市をはじめ多くのマスメディアにも注目されテレビや新聞、フリーペーパーにも取り上げられた。(図 40～図 45) これを通じて、島根短大の技術力や江津に残る地域素材の豊富さ、そこに住む人や団体の活動、維持・継承される技術や技能を県・地域内外に発信し、認知されたことは当初の目的を少なからず達成されたと確信する。

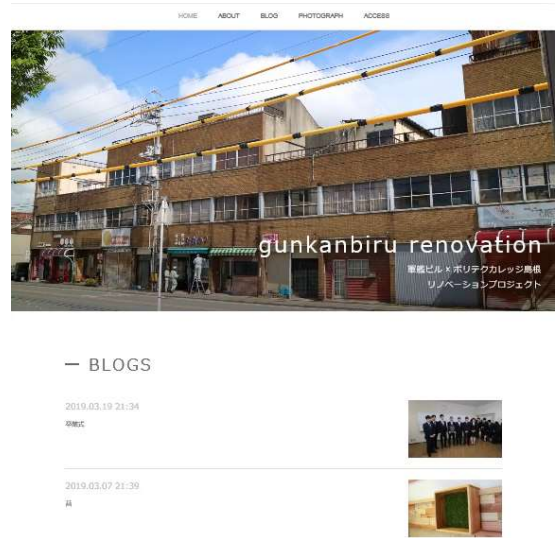


図 39 ウェブページ

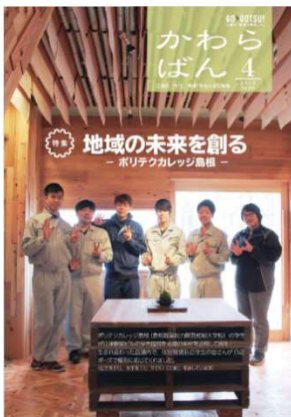


図 40 江津市かわらばん 2019. 4 月号



図 41 ごうつまちなか通信 No. 14



図 42 浜田医療センター 一情報誌 2018. 7 月号



図 43 山陰中央新報 2019 年 3 月 16 日



図 44 読売新聞 2019 年 3 月 16 日



図 45 中国新聞 2019 年 3 月 16 日

④ 多様性による維持・継承

本活動は、地域課題や自然素材など多様なことが学べる活動である。地域の空き店舗問題に関する取り組みとして、出雲市の商店会や兵庫県加西市からも江津市の取り組みの一例として視察があった。また、小学生の地域学習の一環として、チャレンジショップの見学も開催した。自然素材を使用した体に優しい素材で施工した活動としての問い合わせや素材を自ら調達し、エコでローコストな取り組みとの意見も頂いた。地域における技術・技能の維持・継承では、人口減少や地域振興等も含めて考える必要がある、それが多様性を生み地域性のある維持・継承に繋がると考える。本活動はその事例として上げられるのではないだろうか。今後も島根短大の住居環境科において、地域に残る素材や多くの知識や技能を持った人と関わることで他では学べない江津市ならではの地域による技術・技能の維持・伝承を模索し続ける。

6. おわりに

建築の「築」の字は、「竹」「土」「瓦」「木」で出来ており、建築とは竹や土、瓦、木で建てることから始まったと自分の学生時代に教わった事が本活動を通じて実践されたと思う。本活動が学生の糧となり、建築だけでなく人や地域との関わり、そこに根づく産業や歴史等、今後の人生に活かされることを願う。また、江津市内をはじめ多くの方のご理解とご協力により成立したものであり、この活動をまとめ広く伝えることが責務である。全国のポリテクカレッジの中から選定される総合制作実習及び開発課題実習の成果物表彰⁵⁾において優秀賞を頂いたことも本活動が認められ伝えることに繋がっている。本論文も情報発信として一つの活動となることを願う。

完成したチャレンジショップは、2019年7月に手織りの雑貨を製作する方がこの空間を使用し営業をはじめている。2019年度の総合制作実習課題として、チャレンジショップの2階をリノベーションしてワークショップを行える空間を作る予定であり、今後も江津市の人や団体の協力のもと様々な校外学習と実践活動が続けることだろう。

最後に、本活動にご協力いただいた関係者の皆様、ご助言・ご指導いただきました皆様に深く御礼申し上げます。

【参考文献】

1) 江津市ビジネスプランコンテスト

<http://go-con.info/about/>

2) みーもの森づくり事業

https://www.pref.shimane.lg.jp/industry/norin/ringyo/mizumori/mizumori/mi-mo_mori/

3) 若年者ものづくり競技大会

<https://www.javada.or.jp/jyakunen20/>

4) 江津駅前ビルのリノベーション HP

<https://gunkabiru.amebaownd.com>

5) 総合制作実習及び開発課題実習の成果物表彰

http://www.jeed.or.jp/js/kousotsusya/polytech_co/senmon_ka/hyosho/index.html